

【研究論文】

S.R.ランガタンの教育思想：
図書館を舞台としたアクティブラーニングの基礎理論

吉植庄栄（東北大学附属図書館）

1. はじめに

我が国の教育は、アクティブラーニング化に舵を切った。はじめに高等教育の改革が始まり、大学の教育スタイルや施設の変更が着々と進んでいる。

平成 24 年 8 月の中央教育審議会の答申においては、学士課程教育の能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要とされ、学生には、主体的な学修に要する総学修時間の確保、教員には、教員と学生あるいは学生同士のコミュニケーションを取り入れた授業方法の工夫などが求められている¹。

大学において、能動的学修への転換促進はすなわち、従来型の一斉授業では副次的であった、図書等を使った自学自習や、教員・学生間でのコミュニケーションに基づく、グループ学習に主軸をシフトすることも伴っている。大学図書館は従来から、図書と学習の場を提供してきたことから、高等教育のアクティブラーニング化における大学図書館の役割は、重要度を増してきている、と言えよう。

この改革の動きは、高等教育に留まらず、初等・中等教育へも広まりつつある。平成 28 年 8 月 1 日に開催された、中央教育審議会教育課程企画特別部会の資料である『次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（素案）のポイント²』によると我が国の教育の全体をアクティブラーニング化していこうという動きが、大きく打ち出されている。

○「アクティブ・ラーニング」の視点から学習過程を質的に改善することを目指す。

（中略）

- ①学ぶ意味と自分の人生や社会の在り方を主体的に結びつけていく「主体的な学び」
- ②多様な人との対話や先人の考え方（書物等）で考えを広げる「対話的な学び」
- ③各教科等で習得した知識や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせて、学習対象と深く関わり、問題を発見・解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想・創造したりする「深い学び」

この中には、「多様な人との対話や先人の考え方（書物等）で考えを広げる」とあるように、図書を読むことで行う自学自習の励行や、その図書を利用に供する図書館の活用を示唆するような表現もある。一方、アクティブラーニングの担い手・拠点になることを期待される図書館の方は、どうであろうか。高等教育の現場では、アクティブラーニング・スペースとしてのラーニングコモンズ概念が広まり、大学図書館のリニューアルが進め

られている³。従来の整然とした図書の保存庫、静謐な学習空間、といったスタイルを改め、グループ学習、ディスカッションが可能となるスペースを導入し、従来の図書館資料との融合により、ハイブリッド的な新しい空間に転換されつつある。

この高等教育のアクティブラーニング化が、初等・中等教育に波及し、生涯学習にも広がることは時間の問題であると、筆者は考えている。その流れに従い大学図書館の変化の影響は、学校図書館や公共図書館にもいずれ広がるとも考える。変化を迫られる今、何を頼りにしていけば良いであろうか。また現在進行中である大学図書館の変化も、施設の変更が先行しているが、それだけで果たして良いのであろうか。

本稿は、インドの図書館学者である S.R.ランガナタン(1892-1972)に、その回答の糸口を見つけようとするものである。主にランガナタンの著作における教育に関する主張をまとめ、人の一生を通じた教育の理想像を示す。その像を、今後、教育や図書館を改革していく上での指針となる基礎理論として捉えたい。最後にその像に基づき、現代日本の状況と比較した上で提言を行う。

2. S.R.ランガナタン(Shiyali Ramamlita Ranganathan,1892-1972)について

S.R.ランガナタンは、『図書館学の五法則(The Five Laws of Library Science)⁴』（以下『五法則』）等、数々の業績を残した世界的に有名な図書館学者・図書館運動家・数学者であり、教育に関する著作も複数残している。1892年に英領インド帝国のマドラス州（現タミルナドゥ州）シヤリに生まれた。数学の修士号を得て大学を卒業後、数学教師として複数の大学で教鞭を振るった。1924年32歳の時に人の勧めでマドラス大学図書館長の公募に応じ、選ばれてその任に就いた。同年、イギリスへ最新の図書館学を学ぶため留学し、翌年インドに帰国すると、図書館の経営、図書館学の研究に邁進した。見聞した図書館の状況や現場業務の背後には、何らかの基本原則があるのではないかと数学者らしいことを滞英中から考えるようになり、実務経験を積み研究を深めた結果、1931年に代表作となる『五法則』を刊行する。その後、同書を起点に、分類、目録、レファレンス・サービス、選書、図書館管理法など様々な図書館業務に関する著作を残した。

また実務家としてマドラス大学図書館の発展に尽力する傍ら、マドラス図書館協会やインド図書館協会といった広域組織の設立と発展に寄与し、インドの図書館界の発展に一生を捧げた。その背景から、「インド図書館運動の父」と呼ばれる。そして、国際的にも理論家として評価が高い。

我が国におけるランガナタン研究は、宮部頼子氏⁵によると、論文形式での発表は多くなく、内容は『五法則』と『コロン分類』に関する理論的側面のもものが中心であり、さらなる業績の掘起こしと評価を通じて体系的理解が必要である、と指摘されている。この指摘の通り、在世中から図書館情報学分野を中心に、『五法則』と『コロン分類』の紹介的な報告が多い。その後も状況の変化はあまりなく、近年を迎える。

現在は図書館情報学の分野で、緑川信之氏による、コロン分類及びファセット概念の研

究⁶といった図書館分類理論からのアプローチが続いている。しかし当分野でのその他の研究業績は管見の所、僅少である。

一方、竹内愷氏は著書『図書館の歩む道⁷』において、教育の概念がランガナタンの図書館観の基盤にあることを、『五法則』の抄訳と解説を介して紹介した。当業績は、教育の視点でランガナタンにアプローチする地平を切り開いたものであると言えよう。これを受け筆者は、『五法則』の教育概念の検討から研究を行った⁸。しかし以上の緑川氏と竹内氏の業績は、『五法則』と『コロン分類』という従来からの2つの視点の範疇に留まっているとも言える。

ランガナタンが残した教育に関する著作には、1961年刊行の『新教育と学校図書館(New Education and School Libraries)』(1942年刊行『学校及び大学の図書館(School and College Libraries)』の改版)及び同じく1961年刊行『余暇のための教育(Education for Leisure)』第4版(1945年初版刊行 ※初版のタイトルは“Handbook of Reference”)の2つがある。これら2作品を中心としたランガナタンの教育思想についての先行業績は、我が国においては見られない。しかし、これらの内容は「1. はじめに」で示した現在国策で進められているアクティブラーニングの議論と近似するものも多く、インド思想に裏打ちされた魂の問題といった、より高い人間形成観をも示している。これらの著作については、前者を2015年⁹に、後者を2016年¹⁰に、筆者が研究を試みた。

本稿は、過去数年の筆者の研究である、『五法則』と以上2作品に見ることができるランガナタンの教育思想を、アクティブラーニングの視点で総合したものである。また関連するランガナタンの著作も、必要に応じて適宜触れている。

ランガナタンの教育思想については、最初に、ランガナタンが考える「教育の目的」をまとめ、目指すものを確認する。次にランガナタンが考える「教育を巡る状況」を整理し、どのような問題があると考えていたかを探る。最後にその問題に対する、ランガナタンの処方をもとめる¹¹。

3. 教育の目的

ランガナタンは、教育の目的を次の様に述べている。

(教育の目的は) 共同体の各人が自らの得意分野の創造的能力を解放し、自らの手法でその力を発揮するようにすること¹²。

これによると、個々人が自らの特性を知り、秘められている得意分野の創造性を具現化することで、自らの能力を発揮することが理想状態であり、この実現に向けて人を教育せねばならないとしている。何かを強いられて、役目を果たす、というよりも、自己という独特な存在の「特性」をさらに発揮すること、そしてそれらを全員が出し合い、そして協力することで、社会を運営する、のがランガナタンの理想像である。そのために、教育者

は、生徒に自らの特異的な力を解放・発揮することができるように教育をせねばならないのである。

しかし、その人らしい専門に特化してしまうと、人は他者との協力による相互補完をしない限り欠けている部分で苦勞することになる。まさに「自他の敬愛と協力」を行わねば、特性を十分に解放した個々人が完成されても、社会の運営は難しい。そこでランガナタンは、共同体の成員の協力について次の様に述べている。

社会における人間は、ジャングルのそれと異なる。社会で人々は協働して生きる。全ての時代と空間を通じて、そしてあらゆるレベルで、人類社会は知識を蓄える。人間は自分一人の情報、知性、靈感の経験を頼るのみでは生きていけないのだ¹³。

人間が霊的な潜在力を具現したとき、親しく共感的に人々と存在に和合するようになる。協働は全空間と全時間を超えて広がる。協働とは全く至上のものである。その他に選択肢はなく、避けることはできない¹⁴。

ヴェーダの預言者の歌が、協働の重要性を謳っていることも紹介される。

一緒に動き、一緒に話して正しく理解しよう。

一緒によく考え、一緒に達成しよう、

一緒に思いだし、一緒に考えよう。

気持ちの調和、考えの統一は、まるであなた達の強さのようだ。

あなたの中に共生があるためのように。

このヴェーダの賛歌からの引用は他の作品でも多く見られる¹⁵。次にその協働社会は、一つの世界に至ると述べる。

次第に小さな協働社会は、領域を広げていく。家族から村へ村から部族社会に、そして国家へと。その終点は、一つの世界の到来である¹⁶。

小さな協働社会が家族、村、部族、国家、植民地などの段階を経て、最終的には地球全体が一つの世界になるとしている。そして、教育の究極の目的は、この一つの世界の一員であるという「魂の覚醒」に至る事とする。

人類の一員であり全体である、という魂の覚醒(spiritual awakening)の機会を増やすようにする(のが、図書館の目的の一つ)¹⁷。

この目的は、12個に集約される図書館の複雑な目的の中の12個目である。最後ということで、究極目的と言えよう。つまり図書館の究極目的が、共同体(=人類)の中の一人であるのみならず、全体である、ということをおの人に気づかせる、悟らせる、というものである。この点については、「図書館の目的」を「教育の目的」と同じように考えていたようである。ランガナタンは、図書館を次の様に教育の一形態と見なしている。

図書館は普遍教育の手段であり、図書館は、あらゆる教育の道具を一堂に集め、無料で分配し、それらの助けで知識を普及するということである。あらゆる館種を通じて主張してきたこの基本的な原則-「図書館の精神」-は、内なる人(Inner Man)のようなものである¹⁸。

これによると、教育の一手段である図書館は、目指すところも、同じと言えよう。それを踏まえて、竹内愼氏の見解を手掛かりにランガナタンの考える「教育の目的」をまとめる。竹内氏は『五法則』の構造を図1¹⁹のように示している。

この図の三角錐は『五法則』の目指すもの、つまり「図書館が目指すもの」を示している。『五法則』の階梯を示す三角錐の頂上から上に伸びる矢印の目指すものは、「ひとの成熟と成長⇒自立」→「地域・国・世界の発展」となる。「図書館の目的」=「教育の目的」と読み替えると、「人がその人らしく成熟し、自立すること」を経て、その人々が地域・国・世界という共同体において特性を活かし、協力することで、「共同体の発展」が成就するのである。

以上、ランガナタンの考える教育の目的は、(1)人が成熟・自立し、その人らしく特性を発揮できるようになること、(2)人との協働で共同体を発展させること、(3)(1)と(2)を同時に実現できるよう魂を覚醒させること、の3点にまとめることができよう。

4. 教育を巡る状況

では次にランガナタンが、教育を巡る状況をどのように捉えていたかを整理する。ここでの状況とは、主にランガナタンが問題と捉えている状況である。

ランガナタンは、子供時代とは抑圧に満ちており、その原因こそ学校であるとしている。

子供時代とは、抑圧の連続である。家でも、遊んでいても。ああ、そして最悪である

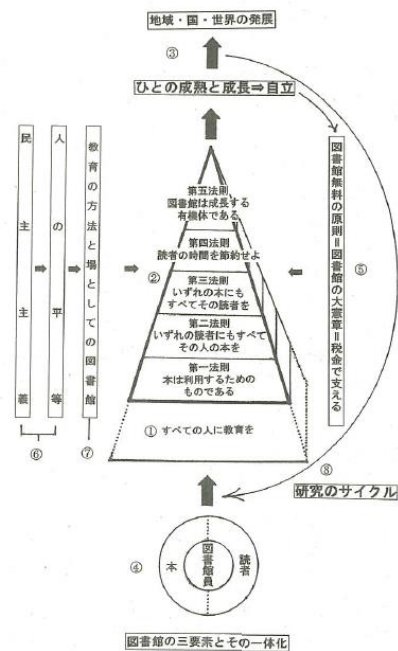


図1: 五法則の構造

のが学校である。大人になり、もし子どもの頃の興味関心が幾らかでも残っているのであれば、その興味関心を再度成長させる機会があるかもしれない。(中略)平均以上の回復力を持つ人であれば、その興味関心は回復することができる。しかし、平均以下の人々は、傷ついたまま終わってしまう²⁰。

子供時代の抑圧の結果、本来持っていた周囲への興味や探求心が破壊され、多くの人々が自己学習することを嫌いになり放棄してしまう。学校教育による抑圧は、一生涯続く自己探求と自己学習の芽を摘み取ってしまうのだ。このような状況下でも、回復する人は良いものの、大抵の人間は学びを再開させることなく生涯を終えてしまう事が、大きな問題であるとしている。

次に、個性を無視した一斉教育・記憶トレーニング的な教育内容に対する批判である。民主主義の発展に伴い、一般教育が19世紀から進展した。これに伴い、ある時点から急激に教育というものは大人数を一斉に教育するという形になった。その時期に、年齢が同じなどの画一的な基準で学級という大集団を構成し、個体差を考慮しない教育を行う様になったと述べている。これにより多くの落ちこぼれを生み出し、能力がある子どもを飽きさせるという結果をもたらした。これは教員が講義した内容を画一的にノートに取るだけ、そしてノートの内容を暗記させ試験をするだけ、という教授方法に大きな問題があるとする。学校を出た後、単に暗記させられた知識は、応用がきかず、陳腐化してしまうことから、無駄になることも多い。これでは、学校教育は失敗で浪費である、と述べる。

また、一人一人の子どもには、固有性(inherence)があり、これは、遺伝、環境(物質、社会、心理、教師)、魂の3つに影響を受けながら成長(becoming)する。その固有性を基軸に教育を考えねばならないところ、大人数を一斉に同じペースで教育を行うことは、無理があるのである。

次に、教育内容の批判である。科学の発展に比例して、学校で年々教えなければならない内容は、次々に増加することになる。

情報爆発が導くカリキュラムの過積載(中略)このジレンマ(筆者注:人類社会の発展による情報爆発、それに対して脳の記憶量は限界がある。)が学校のカリキュラムデザインに大きくのしかかる²¹。

科学の発展に対応し続けていると、教育現場では授業時間不足となってしまう。つまりカリキュラムに教える内容を詰め込み過ぎてしまい、やがて破たんしてしまうのだ。そしてこの詰め込みによる学習が、学生時代に集中していることについて、ランガナタンはこれをラクダ理論(Camel Theory)として、批判している。

このラクダ理論とは、旅人が砂漠を横断する際に、ラクダに生活物資を全部積みこんで、行程中にその物資を消費して目的地に無事到達する過程を、人間の成長と教育に例えたも

のである。

ラクダ理論は排さねばならない。この理論によると、教育とは、人生の旅路を終えるまで必要と考えられうる事実や理論、情報の全てを生徒全員に、一方向の一斉講義で教える、というものである²²。

何故排さねばならないかと言えば、子ども時代に詰め込まれた教育内容が年々陳腐化することで、世界の発展変化に対応不可能な大人になってしまう、という理由である。

以上、教育を巡る状況について、ランガナタンが問題としていることは、(1)学校での抑圧:好奇心の破壊、(2)個性を無視した一斉教授、(3)教育内容の過積載とラクダ理論の実践、の3点にまとめることができよう。次節でこれらに対する処方を紹介する。

5. 問題に対する処方

以上挙げてきた教育を巡る状況、いわば問題に対して、ランガナタンは本来の教育とは何か、の観点で処方を示している。最初にその箇所を提示し、各論についての主張をまとめる。

教育とは、

1. 記憶トレーニングではなく、学校図書館の活用による、外部記憶装置の使い方トレーニングであること
2. 同じスピードで、同じことや情報を学ぶような大人数の一斉授業ではなく、学校図書館の活用による、個人の興味関心を自分のペースで学ぶような個人指導学習であること
3. 受動的に、抑圧的に、孤独に、部分的な内容を学ぶのではなく、学校図書館の活用により、活動的に、実験的に、創造的に、そしてグループ学習的に広い分野を学ぶものである²³。

(1) 図書の使い方の教育

記憶トレーニングである知識の詰め込み教育の問題を解消するため、外部記憶媒体である図書等のメディア²⁴の使い方を生徒に身に着けさせるべきと、ランガナタンは主張する。つまり可能な限りの知識を生徒に暗記させるのではなく、「どこに行けば」「何を見れば」「どのように探せば」必要な知識を入手でき、直面している問題を解消することができるかをトレーニングすることが、長い人生を生きるためにはより有益なのである。

人間の暗記できる量は限られており、覚えた知識も時間が経てば陳腐化する。しかし図書が代表する情報メディアの使い方さえ身に着けていれば、どのような時にでも新しい情報を入手し、いつでも学習は能動的に再開できるのである。

(2) 個人の興味関心を自分のペースで、能動的に学ぶ能力の育成

「図書」を介した情報の入手方法とその利用方法を教育現場で教えることで、学校卒業以降は、図書から情報・知識を摂取し、自らのペース、タイミングで興味関心に基づく能動的な自学自習を進めることを可能にさせる。特にこれは、成人になってから効果が大きい。つまり自分の時間、ペースでの学習も可能とするため、仕事を持つ成人が余暇に学習することを可能にするのである。

成人に対する教育は終日行うことができないものであり、余暇にのみ行うことができる。そのため、学校教育の様に長時間拘束して講義を聞かせるといった、通常の教授方法は手段として取れない。その結果、図書による自学自習が基本となる²⁵。

また、成人に近づけば近づくほど、個々人の興味関心は個別化していくため、本人の周囲にその関心を満たす教え手は居なくなっていく。しかし図書は、遠い過去の人や、はるか離れた外国の考えの伝達を可能にするメディアである。これを使う事で、個人の興味関心を深く満たすことが可能となる。

これを成就させるためには、学生時代に十分「図書」を活用した自学自習の技能を身に付けておく必要がある。この技能を育成することは、学校における記憶トレーニング・一斉講義中心主義の弊害を克服する事に繋がり、抑圧による好奇心の破壊を防ぐことになる。

(3) グループによる能動的な学習

次に、グループで能動的に学ぶことの推奨である。ランガナタンによると、教育の手法には「徒弟型」「研究室(Laboratory)型」「工作室(Workshop)型」「講義型」「ディスカッション型」「フォーラム型」「図書館活用型」「プロジェクト型」の8つがあり、その比較検討²⁶の結果、主体的に学ぶ点とグループで学ぶ点で「研究室型」「プロジェクト型」の2つを特に高く評価する。終始受け身で苦痛を強いられる「講義型」については、変えたほうが良いとしている。

「プロジェクト型」については「(8つの) 全ての方法を統合するものであり、教育を創造的に、幅広い経験を下地とするものにする²⁷。」とも述べている。さらに、複数名のメンバーによるグループでプロジェクト的に学ぶことは、お互いの得意不得意を補完し合い、個性の多様性をかえって魅力的なものにする。その中で生徒は社会性を養い、皆が一緒に成長するという感覚をも養うことになるのである、と述べる。

(1)では図書の活用による、「個人」学習を推奨しているが、それと同時にグループ学習方式も、自他の違いの下協働する体験を介して、学び合いによる知識の定着を促進させ、広い範囲を総合的に学ぶことができるもの、として推しているのである。

(4) 学校図書館の活用

以上、「図書」による自学自習能力の育成とグループによる能動的学習の実施のために、ランガナタンは学校図書館が学校の中心となり、教育の舞台になることを提唱している。最初に挙げた教育の定義に必ず「学校図書館の活用」とあるのはそのためである。

この考えは、ジョン・デューイ(John Dewey, 1859-1952)の『学校と社会 (School and Society)』に基づいている。『学校と社会』では次の様に説明されている。

中央は、すべてが図書室に、すなわち、実践的作業に伴う問題の解明に役立ち、その作業に意味と教養的価値を与えるために収集されたあらゆる種類の知的資料に、集まってくる様子を示している。もしこの図の四隅が実践というものを象徴しているとするれば、その内部の中央部は、この実践的活動の理論というものを象徴しているのである。(中略)

(図書室は)それは、子どもたちが、経験したことや問題や疑問や自分たちが見つけた具体的な事実やらをもちこんでくる場所であり、また、それについて議論がなされ、その結果、それらに対して、新しい光が、とりわけ、他の人々の経験、積み上げられた世界中の知恵—図書室に象徴されているものであるが—というものからの新しい光が投げかけられる場所なのである²⁸。

デューイによる図2「学校の中心にある図書館²⁹」について、子ども達は学校の各種の実践の場にて得た知見・経験を、学校の中心にある学校図書館に集まって来て、そこで図書を読み、ディスカッションや教諭への質問によって、より学びを深める、とランガナタンは解説する。学校図書館にある図書などの資料群が、子どもの内面の核(nucleal element)を刺激し、さらなる自己教育を促す、とも述べている。

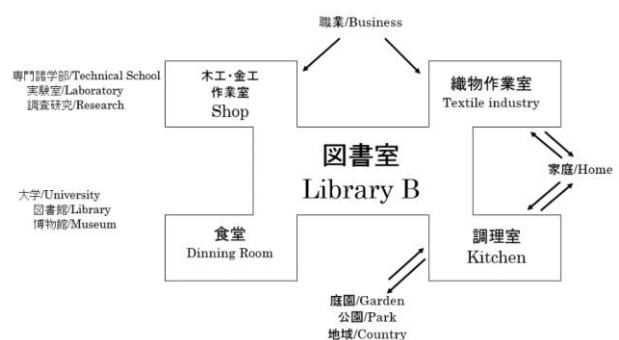


図2 学校の中心にある図書館

これにより生徒たちは、個性を抑圧することなく、試行錯誤を繰り返しながら総合的な知識と、自学自習の技法を身に着けて行くことを可能とする、と結論付けるのである。

6. まとめ

以上、ランガナタンの教育思想を「教育の目的」「教育を巡る状況」「問題に対する処方」という視点で整理した。ランガナタンの教育思想を人の一生涯を通じた観点でまとめると、次の通りになる。

目的：一人一人の素質の発揮、各々の特性を活かし社会を協働運営、魂の覚醒

状況：一斉教育、一方的教授、暗記重視の詰め込み教育による個性の抑圧と好奇心の破壊

処方：時空を超えた知識・情報が詰まった図書の活用による、自分の興味関心、ペースに基づく能動的な自学自習能力の育成、グループによるプロジェクト型学習の実施。以上を、学校図書館の活用を通して行う。

以上のランガナタンの教育思想に対し、次にアクティブラーニングの概念と比較を試みる。最初に辞典的な意味を確認すると、アクティブラーニングは以下のように定義される。

教員が学生に一方向的に知識を教授する講義型ではなく、学生が主体的に問題を発見し、解をみいだしていく能動的な学習方法の総称。高等教育以上の教育現場ではアクティブラーニングという名称が浸透しており、初中等教育の現場ではオープン教育とよばれることが多い。

学生が知識や情報を得る手法だけでなく、課題から結論を導き出す技能が重視される。たとえば、講義や図書、インターネットなどから得られる情報や知識の取捨選択および比較検討、他人の考えと比較しながら考えを練る、結論を的確に人へ伝える、などのプロセスが、計画的に盛り込まれることにより、能動的な学習方法が形づくられる。アクティブラーニングを取り入れた授業は、学生参加型授業、共同学習、探求学習、能動的学習、経験型学習、問題解決学習などの名称でよばれる。実際の授業は、グループワーク、ディスカッション、リフレクション(自己の活動内容を振り返って評価すること)、ディベートなどにより進められる³⁰。

アクティブラーニングという概念は、以上のような様々な要素から成っている。特徴を以下に整理する。

- ・受動的に学ぶのではなく、能動的な学習であること
- ・経験型であること
- ・課題解決型であること
- ・探求型・参加型であること
- ・グループで学習し、ディスカッションや協働作業を行うものであること
- ・学び合い、教え合いが行われること

と言えよう。

ランガナタンの主張とこのアクティブラーニングの特徴とを比較すると、非常に近似している。その差を見出すならば、ランガナタンに特徴的なことは学校図書館を教育の場にする、という考えが強いことのみである。現在の議論では、図書や情報を活用し、ということが文部科学省の答申や審議のまとめには含まれるが、学校図書館を中心にアクティブラーニングを進めて行く、という議論にまでには至っていない。

これは、ランガナタン自身が図書館学者であったことが由来である。しかし、その主張をよく検討すれば、図書の特性やJ.デューイの理論に基づく学校図書館の場所としての活用、という理論も首肯できるものである。一例を挙げると、一生涯自ら学ぶためには、「図

書」という外部記憶装置を使い、これを教師とする、という主張について、その「図書」を大量に備え、一定の法則に基づいて陳列し、利用に供している図書館が、アクティブラーニングの場所となる事は、そう無理があるとは思えない。

次にランガナタンの考えを基礎理論と見なし、その視点をもって付言的に現代日本の状況を分析し、3つ提言を行う。

(1)教育学と図書館情報学の連携

従来、図書館学は教育学の近接領域であった。社会教育や学校教育の手段として、特にテクニカルな部分がクローズアップされて発展していった側面もある。教育のために蓄えてきた図書の蓄積が、大量になるにつれ、効率良く管理することが課題となり、目録法、分類法、配架法等の諸技術が開発されていった。時代が下り現代では、図書も情報のメディアということで、情報学の分野と合流し図書館情報学となった。その結果、図書館の現場の技術を探求し、テクノロジーをいかに図書館組織の運営や学術情報流通の効率化に寄与させるかを焦点とする、より理工系的な学問となった。

一方、インターネットの全世界的な展開、資料の電子化、といった多くの技術と社会の変化を背景に、従来の図書館観が大きくゆらぎ、現在は混迷の中にある。そのような中、一度、以上の過程を遡って教育の視点にまで戻り、図書館の本来性を考え直すことが、問題解決のために必要であると考え。再考の結果、現在のテクノロジーを元に図書館自体を再構築することが可能なのではないであろうか。可能となって、はじめて教育の中心に図書館を考えることができるのではないであろうか。

(2)教育機関としての図書館の再考

高等教育のアクティブラーニング化の文脈で、大学図書館は従来の研究・教育資料の保存提供のみならず、アクティブラーニング・スペースの提供、そして人的サービスの提供が求められている。そのため「図書館側が資料の整備のみに重点を置き、その後、利用者は好きに使えば良い」という従来の受動的姿勢から、館内設備と資料を「積極的に利用させ、教育効果を上げる」という能動的姿勢に転換すべきである。

その際に、必要性が高まった人的サービスの要求に応えるため、図書館資料・施設を活用した教育を行うナビゲーター、つまり教育者を図書館に配置するべきではないであろうか。しかし、それを実現している大学は少なく、小中高には司書教諭が配置されているものの、以上の機能を発揮している事例は僅少である。ランガナタンの主張から、大学図書館のみならず、学校図書館、そして公共図書館でさえも、教育を司る者を図書館に置くことを今後一層検討し、実現することが必要であると考え。これも(1)の成就が前提である。

(3)公共図書館と公民館・市民センターの融合：資料と場所の融合

公共図書館についていえば、資料の整備と提供、特に貸出至上主義に特化してきた背景

がある。この貸出至上主義とは、公共図書館の仕事と言えば市民に図書を貸し出すことが中心である、という考えである。しかし、これまでのランガナタンの主張に従うと、生涯学習を行うためには、独習のみならずグループでの学びの場や機器類の完備が必要である。現行の体制ではそのような場所・機器類については公民館・市民センターの管轄であり、この要素を兼ね備えている図書館は、まだ少ないと言えよう。これらの分断を乗り越え、融合した施設を提供せねばならない。最近建造された施設には、図書館と市民センターが複合施設として同じ建物に設置されるケースが増えてきており、変化の兆しが見えているが、融合している施設となるとこれも僅少である。

また(2)で述べたような、これらの学習・人間形成をナビゲートし、サポートする教育者が各図書館に必要である。これら人的サポートを配置できれば、生涯にわたる学習と人間形成の充実を一層はかる事ができると考えられる。

7. おわりに

最後に私見である。晩年のランガナタンの著作に、次の言葉がある。

私は、教育の専門職として働く間、現場の実践から次のことを学んだ。

1. 教育とは、結局自己教育であるべきこと
2. 好奇心は自己教育の原動力となること
3. 教師の基本的な役割は、生徒の好奇心を喚起すること
4. 好奇心は、生徒一人一人によって異なること
5. 自己教育に必要な好奇心は、いわゆる「教育不可能な生徒(Un-educable)」や「愚鈍な生徒(Dull)」であっても喚起可能であること

これは偉大な物理学者アルバート・アインシュタインの言葉である「天与の好奇心(Divine Curiosity)」の意味を理解させる経験であった。私は、図書館の中心(Hub 筆者注：ここでは「レファレンス・サービス」＝「ドキュメンテーション・サービス」の意味)にあるものが、一人一人の好奇心を満たすことができるべきである、と考えるのである³¹。

これによると教師が「天与の好奇心」を刺激し、図書館がそれを満たす、という対応構造になっている。ランガナタンにおける教育とは、このように図書館の参画が必須のものであった。あたかも野球に例えると、ピッチャー(教師)が投げたボールをキャッチャー(図書館)が捕球するようなものである。

現在の状況では、教師が喚起した生徒の好奇心は、どのように満たされているのだろうか。ピッチャーが投げたままなのではないだろうか。あるいは、インターネットで調べるところで終わっているのではなかろうか。果たしてこれで良いのだろうか。この言

葉は、現況の再検討に有益な大変象徴的な言葉であると考えている。

【謝辞】

本稿を作成するに当たり、国際教養大学中嶋記念図書館 加藤信哉館長に大変お世話になりました。この場にて御礼申し上げます。

- 1 文部科学省, 科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について(審議まとめ)【概要】」(平成25年8月)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/031/houkoku/_icsFiles/afieldfile/2013/08/21/1338888_1.pdf (参照 2016-08-15).
- 2 文部科学省, 中央教育審議会教育課程企画特別部会『次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(素案)のポイント』(平成28年8月1日)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryu/_icsFiles/afieldfile/2016/08/02/1375316_1_1.pdf (参照 2016-08-13).
- 3 文部科学省.「平成27年度「学術情報基盤実態調査」の結果報告についてー大学における研究教育活動を支える大学図書館及びコンピュータ・ネットワーク環境の現状についてー」によると「学生の主体的な学びを促すアクティブ・ラーニング・スペースは、411校(全大学の52.8%)が設置し、これも初めて過半数を超えた。」とあり、近年大きく伸長していることが分かる。http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/03/1368704.htm (参照 2016-08-16).
- 4 第一法則: Books are for use (本は利用するためのものである。)
第二法則: Every reader his [or her] book (いずれの人にもすべて、その人の本を。)
第三法則: Every book its reader (いずれの本にもすべて、その読者を。)
第四法則: Save the time of the reader (読者の時間を節約せよ。)
第五法則: Library is a growing organism (図書館は成長する有機体である。)
- 5 宮部頼子「ランガナタン研究の概況および分析」『図書館史研究』6号,1989, pp.88-89.
- 6 緑川信之「ランガナタンにおけるファセット概念の展開」『Library and Information Science』69, 2013, pp.47-81. ほか
- 7 ランガナタン [著]; 竹内哲解説『図書館の歩む道: ランガナタン博士の五法則に学ぶ』日本図書館協会, 2010.4, 295 p.
- 8 拙稿「S.R.ランガナタン『図書館学の五法則』に見られる教育の概念ー図書館を人間形成の観点で見るー」『教育思想』39号, 2012, pp.97-114.
- 9 拙稿「S.R.ランガナタン "New Education and School Library" に見られる教育の概念と学校図書館観」『教育思想』42号, 2015, pp.19-48.
- 10 拙稿「S.R.ランガナタン『余暇のための教育 (Education for Leisure)』に見られる教育の概念とインドの人間形成思想について」『教育思想』43号, 2016, pp.33-55.
- 11 この手法は、西條剛央著『チームの力: 構造構成主義による"新"組織論』(ちくま新書, 1124), 筑摩書房, 2015.5, 221 p.等に提示されている「方法の原理」を参考にした。
- 12 S.R. Ranganathan; assisted by P. Jayarajan, *New Education and School Library*, (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 4), Ess Publications for Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 2006, c1973, p.35.
- 13 Ranganathan, *Classification and Communication*, Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 1951, p.123.
- 14 Ibid. p.125.
- 15 *New Education and School Library*(1961), *Education for Leisure*(1963)など。これら

- の作品で提示される賛歌と後半部分に語句の相違が見られる。
- ¹⁶ Ranganathan, *Classification and Communication*. 1951, p.13.
- ¹⁷ Ranganathan, *Reference Service*, 2nd ed., Asia Publishing House, c1961, p.171.
- ¹⁸ Ranganathan, *The Five Laws of Library Science*, 2nd ed., Bombay: Asia Publishing House, c1963, p.354. ; 翻訳: S.R.ランガナタン著 ; 渡辺信一, 深井耀子, 洪田義行共訳『図書館学の五法則』日本図書館協会, 1981, p.331.
- ¹⁹ 竹内哲『図書館の歩む道』2010, p.19.
- ²⁰ Ranganathan, *Education for Leisure*, 4th ed. (Ranganathan series in library science, 8), Asia Publishing House, 1961, p.45.
- ²¹ Ranganathan, *New Education and School Library*, p.41.
- ²² Ibid. p.51.
- ²³ Ibid. p.108.
- ²⁴ *New Education and School Library* では、外部記憶媒体(externalised memory)は参考図書(reference books)としている。これは調べものをするための本ということが念頭に置かれているのだが、一般の図書でも同じことは言え、後述するように、図書とはこれまでの思考エネルギーが詰まったメディアであると考えれば、大概念である「図書」と考えて良いはずである。
- ²⁵ Ranganathan, *Education for Leisure*, p.11.
- ²⁶ Ibid. pp.117-131.
- ²⁷ Ibid. p.130.
- ²⁸ John Dewey, “School and Society,” *John Dewey, The Middle Works, v.1: 1899-1924*, Southern Illinois University Press, 1976, pp.49-51. 翻訳: ジョン・デューイ著; 毛利陽太郎訳『学校と社会』, 明治図書, 1985, pp.112-116.
- ²⁹ Ibid. p.49. 翻訳: 同上 p.112.
Ranganathan, *New education and School Library* では p.79.
- ³⁰ アクティブラーニング(あくていぶらーにんぐ active learning). 日本大百科全書(ニッポニカ・プラス) (JapanKnowledge Lib.所収). 小学館.
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001150309328>, (参照 2016-08-15).
- ³¹ Ranganathan, *Documentation: Genesis and Development*, (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 3), Vikas Pub. House, 1973, p.75.